「書くこと」の歴史を問うために

研究視座としての「日記文化」の可能性と学際的・国際的連携

田 中 祐 介

き綴る営みをめぐる研究の展望について一考してみたい。 き綴る営みをめぐる研究の展望について一考してみたい。 す」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 文」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 文」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 文」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 文」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 文」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 文」(エゴ・ドキュメント)に関する学際的・国際的な研究が進ん 大回標を を扱う研究の展望について一考してみたい。 大回標を を扱う研究の展望について一考してみたい。 大回標を を扱う研究の展望について一考してみたい。 大回標を を扱う研究が進ん でいる。 本記がら、 大回標を といる。 大回が といる。 大のる。 大の

近年、日記、自伝、私信、回顧録などを包含する「自己証

言

研究視座としての「日記文化

二〇一四年九月より、科学研究費助成事業の一環として「近

シンポジウムでは、

日本の支配下にある満州と台湾におい

記研究」として馴染み深いものである。

ただし後述もするよう

②は特定の日記の資料的価値を明らかにする点で、従来の「日

島利栄子氏との特別対談、 いる「女性の日記から学ぶ会」(千葉県八千代市) という 最後には、日記の蒐集と読み解きの活動を二十年以上続 幸いなことに多くの来場者に恵まれ、二日間を通じて実り [行為] 一総論二 日記という『遺産』」)。さらに第 第二日目の最後には総合討論を設け の代表である it \mathbb{H} Ć 目

0)

に加え、

両日とも冒頭では私が導入役を務めた(「総論

日記

軸を提示した。すなわち、①「モノとしての日記」、 ての日記」、③ シンポジウムの総論では「日記文化」を扱う三つの基本的 「行為としての日記」である。 ② 「資料と な

ある研究発表と討論の時間を共有することができた。

らず ○○種類以上が刊行されたほどであった。日記帳は国内の五六年末の時点で、翌年用の日記帳は二○以上の出版社から、 趣味等に応じた多種多様な日記帳が出版され いて日記帳の出版文化は独特に発達し、ライフステージ、 とそれにまつわる文化を問題にすることである。近代日本にお の日記をモノとして扱うとは、 「外地」にも流通し、 最適な慰問物として戦場にも送られ 日記帳の生産と流 た。 例えば一九三 内のみな 通の実態 職業、 =

 \mathbb{H} て複数言語で綴られた日記の書き分けの原理が検証され 記 の意味が問われた 大岡響子報告)、死を目前にした学徒兵にとっての読書と (中野綾子報告)。 (高媛

> 向け文庫として出版された「非行少女の日記」は、日記原典 日記」として読まれることを予想しつつ、 する表象空間でもある。 練習場としても日記を用いた(大野ロベルト報告)。 告白性と真実性が期待される日記は、 北條民雄は自分の 同時に創作 書くも 実際には虚実の Ŏ が ジュニア 上の文体 「作家の

夕美子報告)。そして私自身は旧制高等学校の寮日誌を題材に、 資料としての可能性を探った報告もあった(中村江里報告、 誌や銃後日記を題材に、 て、作者の私小説と見做されるに至った(康潤伊報告)。 の存在すら覚束ないが)の改変と大幅な創作的要素の 安易な一般化の誘惑に囚われずに歴史 加味を経 病床日

本来は秘匿されるべき「内面の日記」に他者の声が介入し、 に紙面を炎上させることの意味を考察した。 時

ようとした。今回 け、 づくるかを重視する。 としての日記行為の浸透が書き手の心理や行動をどのように形 館、二〇〇九) 先行研究である西川祐子『日記をつづるということ』 綴る行為自体を問題化することである。この視座からの貴重な 最後に③の「行為としての日記」は、 それによる規範の形成と逸脱のダイナミズムを明らかにし は、 のプロジェクトでは西川 日記の内容のみならず、個人習慣、 西川は日記を「国民教育装置」 日常的 の研究を踏まえなが 習慣 と位置づ (吉川弘文 的

生向けの広告で日記は「国民的観念を養成せしむる」ための 検討した。たとえば明治二十年代後半において、 日記を綴る行為を通じた書き手の規範 北化と逸 軍人向 |脱の具体相を

ては 差異化を図った高等実践女学校の書記文化 報告)、「女学生」の規範を体現する高等女学校に同一化しつつ を問うべく、雑誌の投稿欄を通じた少女文体の形成 報告)。また、より広い視野から規範化と文体獲得との 再評価とどのように連動したかを問う報告もあった が称揚する少女の「純粋の声」という規範が当時の王 ために日記を書く行為が奨励された 当の方法」と位置づけられた 「農村らしい」表現を身につけ、「農民らしい」生活を送る (柿本真代報告)。 (河内聡子報告)。 (徳山倫子報告)、 農村地域にお (川勝 (嵯峨景子 朝日 Ш 関係性 端 記の 麻里 康 女 成 11

の意味

(新藤雄介報告)

が考察された。

昭

子高等師範学校における婦徳の規範と生徒の自己表現との相関

(磯部敦報告)

が検討された。

文化と研究状況 ために、日本中世の日記文化 てシンポジウムでは「近代日本」を浮き彫りにし、相対化する に応じた様々な位相において為されたものである。以上に は、 このように、教育装置としての日記を通じた書き手の規範化 社会階層、 にも視野を広げた。 教育段階、中央と周縁、 (宮田奈奈報告)、近現代タイの日記文化 (松薗斉報告)、 地域性、 ヨーロッパ ジェンダー等 (西田昌 の日記 加え

記資料群の書目リストを作成した経験があった。そのうち明治 料館名誉教授、 で私には、大学院時代の恩師である故福田秀一氏 今回の科学研究費助成事業では、 日記資料のデータベース化にも取り組んできた。 国際基督教大学元教授)が蒐集した近代日本の日 研究を支える基盤を整備 (国文学研究資 これま す

> 実習日誌にみる学ぶ者から教える者への転換(堤ひろゆき報告)、 ジウムでもこのコレクションの日記が活用され、 目録を作成し、「近代日本の日記帳」と題して公にした。 以降に綴られた手書きの日記帳 和期の役所勤めの日記にみるプロレタリア文学の消費的 (計四九二冊) については詳細な 大正期 シンポ

み解く「ならべ読み」の環境整備をすべきであると考えてい づけ読み」に加え、同時期に綴られた複数の日記を並行して読 把握に一歩踏み出すとともに、一人の日記を時系列に読 データベース化を通じて、 人々が綴った日記が無数に出版されてもきた。今後はそれらの のためにも目録化は欠かせない。また、これまで有名無名 に慎重を期さねばならないが、資料の全容把握と安定的 事している。個人情報の塊である日記の学術的な利用に が収蔵する約三○○○点の日記・書簡・家計簿の目録 二〇一四年八月からは、先述した「女性の日 近代日本における日記資料の総体的 記から学ぶ会」 にも従

行為としての日記をリテラシー 史に位置づけ

が端的に述べるように、リテラシーの獲得と実践によって、人々 シー史に位置づけることができる。デヴィッド・ヴィンセント するならば、それを読み書きにまつわる歴史、 度から深められるであろうか。 日 記文化」の研究によって、 近代日本の 日記の行為としての側 理解 はどのような角 面 に着目

ŋ

れは紛れもない読者であり、

現在の自己とは異なる他者

た日記でも、

した自己演出の空間でもある。

どのように秘匿され

日記を読み返す将来の自分自身を思い浮かべ

、る限

従

記に自己を書き綴る行為がいわば

「見られているのに見ら

と言える。 を明らかにすることに、 なる。そのような人々の営みが社会構造に及ぼした影響と変容 は空間と時間を越えて他者の思想や知識と繋がることが可 リテラシー史研究の大きな意義がある 能と

性と真実性が期待される。 を書き続けることの意味が下支えされた。 行為を通じて、 記を書き続けることもある。 を綴る行為にも当てはまる。 ければ一日が始まった気がしない」と同じ気持ち悪さが、 位置づけられよう。しかもそれは、 を継続的に綴る日記は、 の思考の産物を公私に発信する。なかでも日々の出来事や内面 おいて実践する。 るための職務上に、 おいては修養や人格陶冶のイデオロギー 自己を綴るメディアとしての日記には、 人々は「読むこと」の能力を獲得した後は、それを賃金を得 毎日の実践を通じて習慣化し、身体化する。「新聞を読まな 日記、手紙、 不断に自己に向き合うことでもある。 投書、 同じように「書くこと」の能力も、 あるいは余暇の読書に、 創作、 最も日常的な書記行為の反復的実践と しかしそれは往々にして、 それは換言すれば、 人によっては、数十年にわたり日 評論等に活かされ、 新聞を読むことと同じよう 先述したように告白 とも相俟って、 日々の新 日常的に書く 人々は自身 読者 近代日本 職務 聞閲読に 日記 自己 の眼 のほ

> を想定しない日記はない。 容は取捨選択され、 である。 より公的 な性格の強い書記媒体と同様に、 虚実が錯綜する。この意味に おいて、 綴られる内

内容は一見自由にみえて、 場合は叱責が加えられ、日記の内容を是正する。 付した。点検者の体現する規範に沿う場合は激励が、 晒される場合はなおさらである。近代日本の学校教育では教員 ましてそれが「書かされる」日記であり、 軍隊教育では上官が日記を点検し、時に赤字でコメントを 実は決してそうではない 点検者の 書き手が 逸脱した 朖 差 しに

ことなく、 れる <u>(</u> 誌では、弱音を吐いたまま一日の日記が途絶すれば「何ン 敵愾心を積極的に綴ってゆく。同じく戦時下の学徒兵の 涙して反省し、「今後は、 た(一九四五年三月七日、 こんな日記ではだめだ!」との叱責と×印が紙面全体に刻まれ 綴った生活の日記には激高した教員による「何をしてゐるか! 記スンダ恐ルルナ」と内面吐 血戦を思つて、真に、 例えば太平洋戦争下の一九四五年、国民学校初等科の少女が わなければ健全な軍人精神の欠如を疑われるのである 未記入日には「日誌ヲ忘レル様ナ事デハ駄目」 (同年二月一四日、 偽らぬ自己の内面を綴ることが要求される。 【図2】)。つまり日記には、 頑張ろう」と誓って自国兵への感謝と 【図1】)。日記を全否定された少女は落 どんな苦しいことがあつても、 露が促され (一九四四 恐れ ダ」と叱 年 一月二七 軍隊日 ・デモ

0

もある。

見せることを予想してゐる。

日記は自分が見るもの」と窘めら

では、文体が読者を意識した説明口調に傾けば、「此の文他

一九三二年に綴られた高等女学校生の夏期休暇の

ていないふりをする」約束事で成り立つことを如

実に示す

日記

おめびを申し、注いてあるところを、母に見られ、又もお目玉を、 木されたやうで、体がふるへつ来た。自分が役目主義にした たださました。今後は、どんな苦しいことかあろも、 参称した。どんなぎーハニとがあってもにフィハ米英をないを聞きました。 或が終って 年校前って 光雲神 だっないを聞きました。 或が終って 年校前って 光雲神 だっ 血蔵を、思うりて、真に、頑張ちうと、 零減する固いむきへを申しました。 時局の話を聞きました。警報下附空場に入った時の注 朝のお掃除がすんで、本校の講堂で式があった。却長先生より 當るのすれて、日記をいただいて見ると、がしん」と に、気がつきました。重い足取りて、気へいるとけ様に された、今日は日直 三月八日亦雕大部奉、截日 震すむ時に用意をして だったから作板の電 間為一 00

【図 1】 『Note Book』(〈近代日本の日記帳コレクション〉 288 番) 1945 年 3 月 7 日、8 日

いるっとけい りけるちゃい シろうしい のふっもる 男り大勢りちのちろい それるありまっ うだりですいからちれたして うくとくまりた 月 芝 しまっていっていっていっていまますとれてい K らう幸福で他的人の意味 からううをないるいのううち 曜 ちつうなられる見てやるろうようと けったののありるかりりろし 天氣 防 うと目 ととれたます 温度 12 工 就來午後十一時十七分分 ادرو

【図3】 『夏休の日記』(同上 99-2 番) 1932 年 7 月 27 日



【図 2】 『軍隊日記』(同上 266-3 番) 1944 年 2 月 14 日

ある。 差しとの関係性の本質を穿っている。 員自身が紛れもない「他人」であり読者である矛盾は明らか 、る(七月二七日、 しかしこの矛盾は日記に綴る自己の振る舞いと他者の眼 【図3】)。「日記は自分が見るもの」と諭 す で 教

うな研究の展望と課題が見通せるであろうか。 を近代日本の「書くこと」の歴史に位置づけることで、 己について書き続けることに他ならない。日記行為とその文化 あり、 このように日記とは、 他者の存在との意識的 最も日常的な書記行為の反復的実践で 無意識的なせめぎ合い の中で自 どのよ

書くこと」の歴史を問うために

き合い成果を挙げてきた和田敦彦が自他の研究成果を体系的に むこと」の実態が明らかにされてきた。今日までこの問いに向 示した『読書の歴史を問う』(笠間書院、二〇一四) 一つの達成点を示すものと言えるであろう。 読書文化史の研究の進展により、近代日本における「読 は、この分野

会を視野に入れた広い文脈では、 己語り」という点では私小説研究の豊富な蓄積がある。 きただろうか。従来この主題は文学研究において、 定の成果を収める一方、「書くこと」の歴史はどれほど問われて 表現史として進められてきたと言える。さらに書き手の このように近代日本における「読むこと」の歴史の 作文教育、新聞雑誌の投稿、 例を挙げれば まずは 研究 作家 自 が

sity Press, 2013) がある。

綴り方教育等に関する研究も為されてきた。

分に探求されてきたとは言えない。 育にも筆を割いている。 てきた領域を、 メディア・イデオロギー(政治)・文学という、 明治三十年代の作文教育を取り上げた高橋修は、 めに示唆深いこの視座からの問いは、 たか」を見出そうとの目論見から、作文教育と合わせて日記教 に相応しい子供――〈少国民〉 横断的に問題化する」ことを通じて「国 近代日本の書記文化を明らかにするた がいかに編成されようとしてい しかし今日に至るまで充 別個に研究され マス 民国家

る。

○ 無 Record the Japanese Empire (Cambridge, MA: Harvard Univer-場で綴られた日本・中国・アメリカの兵士の日記を多数分析し 所感を手がかりに日本の軍隊教育の一側面を明らかにした。 代日本の徴兵制と社会』(吉川弘文館、二〇〇四) は兵士の日記 む日本文化史』(平凡社新書)も世に出ている。 一二○一二)のほか、二○一六年には『日記で読む日本史』 た著作として、 完結した『日記に読む近代日本』(全五冊、吉川弘文館、二〇一一 日記を主題とした研究書の刊行は近年も相次いでい 臨川書店)の刊行が始まり、新書版の鈴木貞美『日記で読 Aaron William Moore, Writing War: Soldiers 一ノ瀬俊也

韓国 リア ○一四年) 国際的な共同研究の成果をまとめたものとしては、 ,研究センター 日本・ドイツの共同研究』 が なあり、 による鄭昞旭・板垣竜太編 論集全体をウェブサイトからダウンロ (同志社コリア研究センター、二 『日記が 同 語 記る近代 :志社コ

おり、 Compressed Modernity、二〇一七年一月一五~一八日)。 Document Study は今後の国際連携が提案された(Main Currents of Personal を主題とした国際シンポジウムで報告をおこない、総合討論で 私自身も今年はじめ、韓国全州の全北大学が主催する個人文書 証言文」をめぐる国際研究はヨーロッパを中心に様々にあるが、 ウム「日記からみた東アジアの脱植民地化と冷戦」を開催 これも論文集の一般公開が待たれる。日記を含む「自己 同センターでは二〇一六年三月五日にも国際シンポジ in East Asia: Comparative Perspectives して on

な体制で取り扱うとき、 らば日記のように自己を綴るメディアの文化を学際的・国際的 点では例えば日本の近代文学を東アジアの観点から再構築する 自分達の浮沈を賭けたこれからの〝闘い〞のためにも、 ネットワークで結ばれるべきだと思う。特に文学研究の場合、 文化・文学などを研究する学問分野は、今まで以 トの次の言葉である。「日本学のように、 集の「展望」に寄せられたイルメラ・日地谷=キルシュネライ つつある現状に鑑みて想起されるのは、『日本近代文学』第九 言語を越えた対話と連携がかならず必要となるだろう」。この 「東アジアと同 日記や「自己証言文」を扱う学際的・国際的な研究が進 日本語文学研究』の今後の展開にも期待されよう。 時 代の日本文学フォーラム」や国際査読誌 文学研究からの貢献はいかに可能であ ある限られた地域 上に国際的 それな 国境や 『跨 展 な 0

> 手の声と生活の証は暴力的に一義化されてしまう。 てきた。そのとき紙面に響く様々なノイズに耳は塞がれ、 明する理論の傍証を求めて、日記の内容が鵜呑みにされ、 る。事実と真実への大きな期待から、あるいは社会の変動を説 精錬されながら、 するのは、言語論的転回を経て各研究領域の方法論がますます 究の作法に見いだせる。これまで様々な研究の場を通じて痛感 るいはそれ以上の可能性は、日記という媒体に向き合う際の研 れることも少なからずあるであろう。しかしそれと同様 ると歴史の隙間を埋める一次資料と単純に見なされることであ 声を超えた意思や思想が過剰に読み込まれる場面を何度も見 もちろん特定の作家やその作品の分析を通じて貢献が果たさ 日記は私的な記録の場であるゆえに、 ともす 書き あ

0)

が生まれる磁場と捉えることに他ならない。 はなく、真摯に向き合うことでまさしくそこから新鮮な「問い こと。換言すれば、日記を学的関心の「問い」に応える論拠で り相貌を新たにし、書き手が想像しなかった意味が見出される 待に応える都合のよい資料としてではなく、異質な「 して向き合う態度であろう。虚実が混ざり、読み手の解釈によ そうした危険を回避するため必要なのは、 日記を研究者の期 他者

0) と視座を活かすべきではないか。 歴史を問い、 義的な理解を抑制 見して事実性が担保されがちな日記資料にこそ、 様々な文脈での「自己語り」の構造を明らかに Ļ あるいは抗ってきた文学研究の蓄積 近代日本における「書くこと」 テクスト

をもたらすことにも繋がるであろう。
ている。日常的に自己を綴る日記行為を手がかりとした「書くている。そのような研究の進展は私小説研究の成果を逆照射し、文学テクストにおける「読み書き」の歴史の理解を豊かにするて、近代日本における「読み書き」の歴史の理解を豊かにするである。そのような研究の進展は私小説研究の成果をあわせて、立学研究は豊富に有しするために不可欠な資料批判の作法を、文学研究は豊富に有しするために不可欠な資料批判の作法を、文学研究は豊富に有し

3

田本は「日記の国」であると言われる。私小説の独自性の起意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、がいますとして提明治以降に制度化され発達した極めて近代的な現象として提明治以降に制度化され発達した極めて近代的な現象として提明治以降に制度化され発達した極めて近代的な現象として提明治以降に制度化され発達した極めて近代的な現象として提明治以降に制度化され発達した極めて近代的な現象として提明治以降に制度化される。私小説の独自性の起意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的なの意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自的」と言えるのかを、学際的・国際的な意味で日本に「独自のと言えるのから、というない。

nikkiken.modernjapan@gmail.com までご連絡頂ければ幸いでたい。なお、今後の研究活動にご関心のある方は、 プログラムの詳細は、http://diaryculture.com で閲覧され

ある(代表田中祐介)。

朝日新聞』一九三一年十二月二〇日、朝刊、一六頁。(2) 「各種『日記帳』風景 一年の日の数よりもまだ多い」『

- 第三九号、二〇一三・三、二三七~二七二頁。 秀一氏蒐集の日記資料コレクションより」『アジア文化研究』田中祐介・土屋宗一・阿曽歩「近代日本の日記帳――故福田
- 曜社、二〇一一年、一五五頁。 ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』北本正章監訳、新一年のでは、一年の一年、一五五頁。
-) http://do-cks.net/works/publication/book01
- 文学――振り返る視点と未来への視点」『日本近代文学』第九(7) イルメラ・日地谷=キルシュネライト「ドイツにおける日本

○集、二○一四年五月、一三八頁。

成果である。 からみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究」)のからみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究」)の 本稿は科学研究費(若手研究B「未活字化の日記資料群

【キーワード】日記、修養、自己表象、読書文化、書記文化